

い消毒液に浸すと、一瞬にしてドス黒くなってしまった。

そのとき、水谷と新田は、右上腕(上腕)の切斷術を終わってタバコをふかしていた。私は麻酔を中止させ、森下に、

「もし、手足を動かさし、麻酔がさめそうな気配を見せたら、すぐエーテルをかけるのだぞ！」と言いつつ、被布をもちあげ、その人の顔をのぞきこんだ。

昏々として深い麻酔におちいつているが、つい、二、三時間前ここに来たとき、見るからに健康そうな顔色をしていたその人は、今はすっかり容貌は一変し、蒼白となり、唇は青ざめている。脈はすでに細く小刻みに、早く打っている。瞳孔はなお縮小し、この人の強靱な生命力を思わせている。

こんどは、いわゆるのどぼとけのところ、私が助手となって高岩に気管支切開術を行わせた。そしてこれで計画したすべての「教育」が終わった。

病院長は伊藤衛生中尉に連絡し、早く後片づけをやるように言ったまま引きあげて行った。軍医たちは、それぞれ軍服に着替え始めた。私も着替え始めるとタバコに火をつけ、便所に出て行った。

便所から帰って来た私は、ふたたび手術室に戻って来た。すでに、いままで中国人の被いのかぶされていた被布は、はぎとられ、いままで見たこともない、異様な、右腕と左脚が切斷された、いたましい、真っ裸の人間が、生きのまま手術台の上に横たわっていた。手術室の片隅には、切斷された大腿と腕が並べられており、衛生兵がタタキの上に水を流して掃除している。

私はこの光景を見て、本能的に、これは多くの人に見せてはならぬと思った。ふと周囲を見渡すと、四、五名の兵隊が手術室の外から窓越しに中を眺めている。私はあわてて、

「オイ、向こうに行け！」

と怒鳴りつけると、森下を呼んで、五CCの注射器を持って来て(させた)、この男の静脈にどのくらい空気を注入したら死ぬだろうかと興味を持っていたからである。

ちょうどいい機会だとばかりに、森下が、すでに細くなった左腕の静脈につき刺した注射器の針を見つめていた。

五CCの空気は、吸い込まれるように全部はいつてしまった。だが、その人にはなにも変化は起こらなかった。私は意外に思うとともに焦り出した。

「二〇CCの注射器を持って来てもう一度やって見ろー」と森下に言った。

森下は二〇CCの注射器に空気を吸い込んで、ふたたび静脈に刺した。少しずつ空気がはいるかに見えたが、円筒子は、ビタリと止まって、森下は、懸命に親指に力を入れて押して見たが、どうしても動かない。あわてた私は……

「どけ！ おれがやるー！」

と森下のそばに立ち、針の先が静脈からはずれないように、ソッと注射器を受け取るとグッと押してみた。依然として注射器は動かなかつた。針がつまっていないのを確かめると、私は注射器を持ち直

し、肘を下腹に当てて全身の力をこめて円筒子を押した。グッグッグッと円筒子が動き出して、注射器の半分ほど空気がはいったころ、左胸の心臓に相当する部位で、不気味なグルグルという音が聞こえた。そのとたん、中国人の下顎が静かに動き出し、私はハッとして針を抜いて見つめていた。

二、三回大きな呼吸をしたかと思うと、ガックリと顎をたれてしまった。と見るまに、蒼白な顔面からいっさいの血の気が、サーと引き始め、見る見るまに、顔貌は死相に変わっていった。私はそのとき、ああ心臓が止まったのだなと直感した。急いで左胸の乳の下に手を当てた。鼓動は触れない。森下に聴診器を持ってこさせると、心臓部に当てた。心音は聴取されず、ただ聞こえてくるものは、人間の臨終の際、心臓が止まった直後に聴取される、あの特有な不気味なサーという雑音だけであった。

私は傍らに呆然として立っている森下に、

「オイ！ 完全に心臓は止まっている。伊藤中尉に連絡をとり、早くうまやの後に掘ってある穴にわからぬように注意して埋めてしまえ！」

と言いつつと、手術室を出た。

外はもう夕闇が迫り薄暗くなっていた。医官室に引きあげてくると、水谷がまだ帰らずに待っていた。私は彼をうながして宿舎へと帰路に着いた。やや歩いてすっかり落着きをとりもどすと、

「オイ！ 水谷君！ 今日の男は、いったいどうした男なんだい。」

と、彼がよく憲兵の治療をしているので、知っているかもしれないと思って尋ねてみた。

「八路の『密偵』だそですよ。」

と彼は答えた。

このとき私は、いやあの人は確かに農民に違いないと不審に思ったが、農民だろうが、「密偵」だろうが、私には関係したことはない、と言いつつ聞かせながら、それ以上追求しようとしなかった。

しかしあの人が息を引き取ったとき、聴診器で聞いた、サーという不気味な雑音が、私の耳もとに執拗に蘇って来た。

そして十一年を経過した今日、いまもなお私の耳底に、ありありと残っている。

いま、私の目の前には、太行の山の端が延びて、河南の沃野に連なるあの麓の美しい遠景が浮かんできます。そしてそこでは、平和を熱愛する中国人の心とが、社会主義の建設のために戦っている。幸福な姿が浮かんできます。しかしその大地の底に、私のため生命を奪われ、万斛のうらみを飲んで死んでいった、幾多の人が埋まっていることを思うとき、私は胸も張り裂けんばかりの思いがします。

ほんらい普通の人間ならば、想像もできないようなことを、私は侵略戦争なるがゆえに平気でこなして来ました。

ほんらい、医は仁術と言われ、医学は人類社会に奉仕すべきであったにもかかわらず、私は、侵略戦争なるがゆえに、意識的に医学を人殺しにもちい、医学を冒瀆したのです。

このあまりにも、にがにがしい、苦しい、自己の体験の中から、私は徹底して侵略戦争を否定しま

す。と同時に、人間の良心と医者としての使命をよびさまし、こうして生かして下さっている中国  
人民に、今しみじみと心からの感謝をささげます。

そして、生きていくかぎり、侵略戦争に反対して戦うことを誓います。

略歴 旧部隊 第一百七師団野戦病院、旧階級 軍医中尉、出身県 岐阜県、学歴 東京医専卒  
(昭和十六年)、年齢 一九一五年生、四十二歳。

戦争犯罪人を追求せよ！ 彼らは、今、  
何くわぬ顔で街を歩いている、笑っている、  
生きている。数千萬もの中国人を殺戮して  
きた数百万の男達が、自らの行為をおし隠  
し、何の自己批判もすることなく、何くわ  
ぬ顔で生きている！

彼らを徹底的に追いつめよ！